

敏腕CEOはウブな婚約者を溺愛して  
離さない

## 目次

敏腕CEOはウブな婚約者を溺愛して  
離さない

5

番外編 ハネムーンは英国紳士の腕の中

245

敏腕CEOはウブな婚約者を溺愛して  
離さない

## プロローグ

「先生、さよーなら！」

「はい、さようなら。気を付けて帰るのよ」

「はーいっ！」

小さな手を振る子どもたちに、ゆずきかすみ 柚木香澄は笑顔で手を振り返した。

香澄は書道家だ。

今は実家の敷地内にある別棟で書道教室を開いている。

平屋の小さな別棟が香澄の城だ。自宅の玄関と教室の出入り口は完全に別なので、家人に迷惑をかけることもない。

平屋の中は畳敷きの部屋になっていて、教室の時はそこへマットレスを敷き、テーブルと椅子を置いてある。香澄自身が書道をする時も同様だ。

実家は地元で不動産業を営んでいるので、香澄が仕事をしなくてもそれほど困るわけではない。けれど、地域の人たちのために書道を教えることが香澄は好きなのだった。

教室の入り口で子どもたちを見送って、玄関から中に入ると、スマートフォンが着信を知らせて

いた。誰からか確認するため手に取ると、ちょうど切れてしまった。履歴を確認すると母屋おむやにいる母からの着信だ。

香澄は長い黒髪をさらりと背中流し、少し考えたあと、そつとスマートフォンを玄関に置いた。片付けをしてすぐに母屋に戻るの、かけ直す必要はないと考えたのだ。

日に当たるのが少ないせい、香澄は真っ白な肌をしている。丸い綺麗な卵型の輪郭と大きな瞳は童顔で、ともすれば幼く見られてしまう。日本人形のような容貌の持ち主だった。

テーブルと椅子を片付けて教室に鍵をかけ、香澄は母屋に向かう。玄関を入ると、母屋の一室から大きな声が聞こえていた。廊下にまで聞こえるほどの大声でしゃべっているのは伯父だ。

ちょうどキッチンから出てきた母は、お茶を持っていくところだったらしく、手に茶器の載ったお盆を持っている。

「香澄ちゃん、ちょうどよかったわ。伯父さまにお茶を出してくれる？」

「あら、タイミングが悪かった？」

ちよつとおどけて香澄がそう言うと、母は苦笑する。

「私にはとてもいいタイミングだったわよ。そう言わないで？ お父さんのお兄さんなんだから」

「はあい。お稽古の道具を部屋に置いたら持っていきます」

香澄が引き受けると、母は安心したようにキッチンに戻っていった。

自室にお稽古用の道具を置いて、香澄はお茶の用意をしていた母からお盆を受け取り、客間へ向かったのだった。

「伯父さま？ お声が廊下にまで響いていますわよ」

「だって香澄、つい大きくなってしまっただろう」

くすくすと笑いながら、香澄は和室を洋風に変えた和洋折衷の客間に入り、テーブルの上にお茶とお菓子を置く。

いつだってこの伯父は大袈裟なのだ。伯父の向かいで父も微妙な顔をしていた。込み入った話なのかもしれない。香澄は用を済ませたら部屋を出ようと、そっと立ち上がる。

先ほどまで大騒ぎしていた伯父は、その香澄の仕草をじっと見ていた。

「よいことを思いついた」

「兄さん、それは止めてください」

何か思いついたらしい伯父を即座に父が止めた。たった今この場に来た香澄には、何のことかさっぱり分からなかった。

「菜々美が家を出てしまったんだ」

伯父は腕を組み、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「あら……」

香澄に話しかけてきたようだったので、足を止めた。

従姉妹の菜々美はお嬢さまなのだがとても自由に生きている人で、もともとこの柚木家の型にはまった部分が合わずにいた。菜々美なら、家を出ても自力で生きていけるだろう。それくらいにバ

イタリテイのある人だ。むしろ、そんな従姉妹を型にはめようとする伯父の方に無理がある。

「菜々美ちゃんは自由だからなあ」

「自由すぎる！」

父の呑気な物言いに、伯父は大きな声で返す。

（伯父さまの雷が落ちたわ）

香澄は苦笑する。

「大体、今週末は見合いをするはずだったんだ。家を出るだけならともかく、置手紙をして家出状態だ」

吐き捨てるような伯父の声には同情するが、所詮は他人事だ。

「あらら。そうだったんですね」

それはお見合いが嫌だったのでは？ と思ったけれども、香澄は口にはしなかった。

「頭が痛い。散々探しているが、どうやって隠れたものか見つからない。見合い相手は大手コンサルティング会社の敏腕CEOなんだ。取引相手でもあるし、こちらからの失礼は許されない」

「大変ですわね」

香澄があまり気持ちのこもっていない同情を口にする、伯父はまたじつと香澄を見ている。

（ん……？）

「香澄は菜々美と年齢が近かったな。いや、むしろお前の方が年上だったのではなかったか？」

大学を出たての菜々美は二十三歳で、香澄はその三歳年上の二十六歳だった。童顔で幼く見える

ものの、三歳年長であることはあまり大きな声では言いたくない。

「ま……あ、私の方が年上、かも？」

菜々美は伯父夫婦が年を重ねてからできた愛娘だった。可愛がられて育てられたので、わがまみに育ってしまったことも仕方がないのではないだろうか。

「従姉妹ならそれほど変わらないだろう」

先ほどまで取り乱した様子だったのに、伯父は急に落ち着きを取り戻し始める。

（え、ちよつと待って。それは……）

「兄さん……」

父の咎めるような声で、やつと香澄は危機感を覚え始めていた。

「伯父さま？ どういうことかしら？」

声が震えそうだ。

「交際相手でもいるのか？」

「いませんけど」

自慢ではないが生まれてこの方、香澄は男性と交際をしたことがない。

「ちよつどいいい」

（ちよつどいいってどういうこと!?)

心の中で叫ぶことはできても、現実にはどうしたらいいのか分からず、おろおろしてしまう。嫌な予感をするものの、香澄は逆らう術すべを持っていなかった。

「あの……どういう？」

これが現実なのだと信じたくない。

（お見合い？ いつですって？ 今週末!?)

「さっき言ったことを香澄も聞いていただろう。こちらから失礼なことをするわけにはいかない相手なのだ。それに、お前だって交際相手はいないと言っていたじゃないか」

（確かに言った。言ったけれども！）

先ほどまでは他人事だと思っていたのに、それが急に自分の身に降りかかってきて、香澄は必死で伯父に伝えようと口を開く。

「私……無理です！ それにお相手は、菜々美ちゃんが来ると思っているのですよね？」

「大丈夫だ」

そう言っつて、伯父は香澄をまたじつと見る。香澄はその視線を手で払えるものなら払いたかった。

「お前は若く見える」

（そういう問題じゃないんですっ！）

「いや、兄さん。本当に香澄は無理ですよ」

父の横でこくこくつと香澄は頷く。香澄は押しも押されぬ女子校育ちだ。それに社会に出ないないので、箱入りであることにも自信がある。そんな自信はどうなのかと自分で思わなくもないが。

「なんでだ？」

香澄にも香澄の父にも反対されて、伯父は慥然とした。

父と兄弟で経営している不動産会社では、ワンマンで知られる伯父だ。強く返されるとさすがに迫力がある。

「だって、ずっと女子校で育ってきたんです。知らない方とそんな風にお見合いでお話しするなんて、きつとできません」

香澄は一生懸命、無理な理由を説明したつもりだった。

けれど、伯父はなぜか機嫌がよくなっただけだ。

「なおさら、お見合い相手としてはちよūdいいな。身持ちが固いのはよいことだ。それに、こんなことでもなければ結婚の機会もないだろう。嫌なら断ればいいんだ。とりあえず週末はお見合いをしなさい。いや……」

伯父は軽く咳払いをすると、今度は香澄に向かって思いきり頭を下げた。

「助けると思って！ 頼む！ 香澄、見合いに行ってくれ！」

強く言われたら反発できるけれど、頭を下げている人を無下にするのは難しい。

（ず……ずるいわ、伯父さまっ！）

「お父さまっ！ なんとかしてください」

「いや、確かに見合いでもしなければ、香澄の花嫁姿を見ることはできないかもしれない……」

——お父さまの裏切り者っ！

こうして香澄は従姉妹の菜々美の身代わりとして、お見合いをすることになったのだった。

## 第一章 身代わりのお見合い

当日は澄み切った空が遠くまで見渡せるような晴天だった。香澄は自分の部屋の窓から雲一つない空を見上げる。

この晴天に反して、心の中はどんより曇っているというのに。

今日は振袖で来るようにと伯父に言われていた。だが、菜々美のために用意された振袖は派手すぎて、香澄にはお世辞にも似合わなかった。着物は自分で用意した。

着物に慣れている香澄だけれど、さすがに振袖の着付けは自分ではできない。だから着付けは、いつも書道の表彰式などでお世話になっている着付けの先生に、自宅まで来てもらうよう頼んだ。

「柚木先生、今日は可愛いお着物ですねえ。まるでお見合いみたいだわ」

香澄は鏡の前で軽いため息をつく。

「その通りなんです」

「あ……ら。あらあら、まあまあ。じゃあ、可愛く仕上げましょうね」

どうして着付けの先生がこうも嬉しそうなのか。

撫子色の生地、牡丹の花を主役にした吉祥花文様をあしらった柄は格調高く、縁起もよく、見た目にも明るく華やかだ。

そこに、銀系の帯と濃い紅色の帯留を合わせると、振袖でも年相応の落ち着きが出た。髪は綺麗にまとめて花を散らされる。

お見合いは憂鬱ゆううつだけれど、綺麗な着物には気分が上がるものだ。それに、端はなから断つてもいいと言われているお見合いである。

お相手には失礼かもしれないけれど、香澄はそれほど真剣になる必要はないと思って、気持ちが楽になった。

そもそも香澄は異性と交際したことがないだけではなくて、男性が苦手な理由があった。

それは、ほぼ男性恐怖症と言っても相違ないものだ。

だからこそ、中学、高校、大学と女子校に通った。学校の先生や身内の男性ならば恐怖心を覚えることなく話せるが、初対面の男性となると話は別だ。

父はそれを知っているはずだった。

それでも娘の花嫁姿を見たいという誘惑に抗えず、つい伯父の言うがままにしてしまったのだろう。

(まあ……お父さまの気持ちも分からなくてはいいけれど……)

香澄は子どもの頃から書道が大好きだった。運よく師匠に恵まれ、早くから才能を見出されており、書道教室には塾よりも熱心に通った。両親もそんな香澄の意向を汲くんで、通わせてくれた。

あれは小学生の時だったと思う。書道教室からの帰りが遅くなった日に、香澄は知らない大人の

男性に声をかけられた。

「君、おうちはどこなの？ こんな時間にうろうろしては危ないよ」

もしかしたら、親切心かもしれないと一瞬考えた。

しかし、見上げるほど大きな大人の男性が自分の前に立ちただかつて、今にも腕を掴みそうな勢いで声をかけてきたのは、子ども心にとても怖かったのだ。

恐怖心から、香澄は「ごめんなさい〜！」と泣きながら師匠の教室に戻った。

そこからは稽古のたびに、車で送迎がつくようになった。

あとから聞いた話では、後日その男は不審者として警察に捕まったそうで、奇くしくも香澄の勘は当たっていたわけだ。

それから香澄は、男性が一切ダメになってしまった。

二十年近く経った今でも、初対面の男性相手ではろくに話すことすらできない。

伯父は香澄の過去を知らず、お見合い会場に向かう車の中で「美味しいものを食べられると思えばいいじゃないか」なんて、呑気に話していた。

家を出る前、父はかろうじて「無理はしなくていいからな」と励ましてくれた。

ホテル内のレストランの個室に入り、相手が来るのを待つ。

香澄は窓の外に目をやった。大きな窓からはホテルの庭が見えている。手入れの行き届いた木と緑色の芝生。緩やかなカーブを描く小径こみちをゆっくり歩いている人の姿も見える。窓のすぐ前に見え

る小川はさらさらと水が流れていた。

ほどなくして相手がやってきた。伯父が紹介しようとする、キツパリとした声がそれを遮った。「子どもではないんですから、自己紹介くらい自分たちでしますよ。ねえ？ 菜々美さん？」声に驚いて、香澄は思わず顔を上げた。そこにはスーツ姿の男性が一人で立っていた。

——違います。菜々美ではありません。

そう言わなくてはいけなかったのに。

「神代佳祐かみしろのすけです。柚木菜々美さん」

初めての男性は怖い。

口をなかなか開けなくて、うつむいた香澄はやつとのことと言葉を絞り出した。

「名前……」

「お見合い相手の名前くらいは把握していますよ」

そのよく通る声とハッキリした物言いに押されてしまつて、香澄はこくりと頷いてしまったのだ。

「まあ……それもそうか。神代さん、どうぞお掛けください」

こちらは伯父が付き添っているけれど、神代は一人で来ていた。彼は、伯父がひっきりなしに話すのを聞いては卒そなく返事をしていたが、伯父が気を遣っていることも香澄にはなんとなく伝わってきた。

取引先の敏腕CEOで、失礼があつてはいけない相手なのだと言つていたけれど、その通りなのだと察した。

そう思うとますます顔を上げることができず、香澄は真っ白なクロスが敷かれたテーブルの上に置かれた、水の入ったグラスをじつと見ていた。

氷が入っていないが、底が丸いグラスはうつつすらと汗をかいている。注ぐ時に冷えた水を入れたからだろう。オシャレな形なのだが、足のついたグラスの方が持ちやすいのにな……と考えた。そして、すぐにそれを心の中で打ち消す。

（そうか、洗うことを考えたら足がない方がいいんだわ……）

なぜか全く関係のないことばかり頭に浮かんでくる。

そうしているうちに前菜が運ばれてきた。香澄は話題を盛り上げることが上手ではないが、伯父は話好きだ。黙っただけでもなんとなく場が進んでいくことに、香澄は安心していた。

前菜の白身魚のカルパッチョは食用の花が散らされ、目にも鮮やかだ。伯父には、フルコースだから料理を楽しめばいいと言われたけれど、その通りだった。

（旬のお魚……すごく美味しい）

お皿がとても可愛いので本当は料理の写真を撮りたいが、さすがにそういった場ではないので我慢する。けれど、ちょっと残念な気がした。

ほとんど香澄が口を開かないまま食事が終わり、突然、神代が香澄に話しかけてきた。

「菜々美さんはとても緊張しているようだし、庭にでも出ますか。少し話しましょう」

菜々美じゃない。けれど、ずっと俯うつむいているのも失礼だろうと、香澄はやつと顔を上げる。

すると、香澄に向けられた優しく綺麗な色の瞳が目に入った。

「榛色……」

「なんですって？」

香澄を見ていたのは黄味がかった茶色の瞳だった。髪も柔らかそうな焦げ茶色で、とても端整な顔立ちの持ち主だったのだ。

首を傾げて香澄を覗きこむ様子も柔らかな印象で、怖くない。少しだけ香澄の肩の力が抜けた。

「少しだけ、二人で話ませんか？」

そう言っただけで庭を指さされた。いつもなら男性と二人きりになるような状況には絶対に同意しないのだが、なぜだか彼の雰囲気にならうことができず、香澄はこくりと頷く。

何か言わなくてはいけないことは分かるのだが、言葉を返せないくらいに綺麗な人だったから。

「少しだけ、お借りますよ」

伯父にそう言いおいて、彼はにこりと笑いかけると席を立つ。そして香澄の方に歩み寄ってきた。

香澄も戸惑いながら席を立つ。

「足元、気を付けて」

彼は歩く時も歩幅を合わせてくれて、着物の香澄を気遣ってくれた。

（優しい、人なんだ……）

庭に面しているドアを出る時も、香澄に先を譲ってくれた。とても紳士的な仕草だった。

「こちらの庭は有名なんですよ」

彼はこのホテルの庭のことを知っているようで、明るい口調で香澄に説明してくれる。庭にはプールのような大きな噴水があつて、水の音が心を落ち着かせる。時々大きく水飛沫を上げたり、小さく水を飛ばしたり、リズムカルな水の動きは見ていて飽きなかった。

「あと五分したら、音楽に合わせて噴水のパフォーマンスがあるんです。それを見たくて」

いたずらを企む子どものような表情だった。

「パフォーマンスが見たかったことは内緒ですよ」

人差し指を口元を持ってきて、彼は香澄に向かって微笑んだ。

「あ……私も見たいです」

「じゃあ、二人で見ましょう。こっちです」

彼は大きなパラソルの下に香澄を連れていく。二人でパラソルの下に設置されている椅子に並んで座った。

とてもいい人だ。早く本当のことを言わなくてはと思うのに、香澄を菜々美だと思っっているから、これほどまでに親切なのかもしれないと考えると、なかなか勇気が出なかった。

「写真と雰囲気違いますね」

指摘されてドキんと胸が大きな音を立てる。それはそうだろう。だって写真とは別人なのだから。

「けど、今日の方が好きだね」

さらりと好きと告げられて、もう香澄はどうしたらいいのかわからなくなる。

口を開きかけると、そこへ音楽が流れてきた。映画の主題歌としても有名な曲だ。

「この映画、観ました？」

「いえ……観たかったですけど」

行く機会もなく観逃してしまった。

「観逃した？」

神代はくすくすと楽しそうに笑っている。だから香澄は安心して話すことができた。

「ええ。でも、音楽は知ってます」

「俺も一緒。観逃しているうちに配信が始まってしまって、リストにいくつも入っているんですね。それすら観ないまま積んでるってのがたくさんある」

香澄も一緒だ。配信のリリースのニュースを見て、もう配信されるといつも驚いている。

「私も映画館で観たいものはあるんですけど」

「今度、一緒に行きますか？ ほら、約束したら絶対観るでしょう？」

音楽はさらに有名な海外のアニメのものに変わる。お姫さまがたくさん登場する、女の子の憧れが詰まった作品の主題歌だ。

噴水のある庭は一気にロマンティックな雰囲気変わった。

「趣味は？ とか聞くものなんですかね？」

神代は香澄におどけてそう言った。

「まあ……」

くすくすつと香澄は笑う。さつきから神代がとても明るく話しかけてくれるから、香澄もいろん

なことを気にせず返事ができるのだ。

「ああ、笑うと本当に可愛いな」

「神代さん、お上手なんですわね」

「そんな風に言わないでください。本当に可愛いって思っているんですから。お見合いなんてと  
思っていたけれど、来てよかったな」

香澄は少し迷ってから、自分をじつと見つめる神代に答える。

「私……は、書道が好きなんです」

「書道って、墨で文字を書く芸術ですよわね？」

神代は空中に字を書いて見せた。こくりと香澄は頷く。

「展覧会などにも作品を出品しますけど、それだけでは食べていけませんから、書道教室をやっています」

「へえ？ 教室……。俺は悪筆な上に、最近は書かなくなってますよ」

「皆さん、そうですね。最近はパソコンで簡単に文書も作れますから。でも手書きもいいんですよ。上手くなくても」

「いいですね」

真面目な顔で頷く神代が教室に来る教え子と重なって、なんだか可愛らしかった。  
大人の男性に対してこんな風に思うのはおかしいかもしれないけれど。

「榛色……」

「え？」

急に神代がそうつぶやいたので、香澄は首を傾げた。

「さっき、そう言いませんでしたか？ 榛色、と」

その榛色の瞳が香澄を真つすぐ見つめていた。瞳を見返して香澄は答えた。

「その瞳です。黄色がかかった焦げ茶色、というのでしょうか。榛色といますよね」

神代は目元に指先で触れて、薄く笑う。

「ヘーゼルアイ、ともいうんです。祖母がイギリス人なんですよ。榛色か……。なんかいいですね」

「ヘーゼルアイも素敵です」

海外にルーツがあるから色素が薄く、伝え方もストレートなのかと香澄は納得した。

「菜々美さん、俺はあなたのことをもっと知りたいな。教室の生徒さんって、子どもばかりなんですか？」

『菜々美さん』と呼ばれて香澄は固まってしまふ。

神代が甘い声で菜々美の名前を呼ぶたびに、自分は身代わりなのだと思しめられるのだ。声が震えそうだった。震えていないといいのだが。

「いえ……子どももいますけど、最近は大人の方も多いですね。学校では十分な硬筆や毛筆の授業はありませんから。大人になって綺麗な字を書きたいと思う方が、レッスンに来るんですよ」

「確かに学校では十分教わらないな。もっと練習してもいいんですけどね」

「カリキュラムの関係で難しいんでしょうね」

「ああ、そうかカリキュラム……お詳しいですね！」

人懐っこい笑みを浮かべ、神代は香澄の顔を覗きこむ。その表情がとてもキュートだ。香澄は胸がきゆうっと締め付けられるように切なくなる。

「学校でも教えているんです。と言っても教員ではなくて、書道部がある学校からたまに校外指導員として呼ばれることがあるので」

「書道部！ そうか、そういうのがある学校もありますね」

「書道科のある大学もありますよ。私は国文科の卒業ですけど」

「それでもプロの書道家として活躍なさっているんですね。すごいな。尊敬します」

「そんな……」

面と向かって尊敬するなどと言われることはそうない。真つすぐ自分の気持ちを伝えることのできる神代を、香澄は眩しく思い、つい見つめてしまった。

「柚木先生……ですね」

「教室でもそう呼ばれますよ？」

神代の口から『柚木先生』などと呼ばれて、香澄はまだドキンとしてしまふ。頬が赤くなっているのが自分でも分かった。

「ふふ、可愛いな。照れますか？」

「なぜでしょう……普段そう呼ばれる時は平気なんですけど。神代さんに呼ばれて照れてしまいま

した」

その赤くなった頬に向かって神代が手を伸ばす。すらっとした指が頬に触れて、香澄は身体がびくっとしてしまった。

「嫌ですか？」

「いえ……ただ、驚いてしまって」

心臓が激しく鼓動を打っている。指先が触れただけなのに、触れられたところがまるで熱を持っているように熱かった。

「たまらないな。謙虚で、話していて楽しくて、素直で、それでいてご自身の仕事にはプライドを持っている」

香澄もこの人がとても魅力的だと思い始めていた。

「菜々美さん……」

けれど、そう呼ぶのを聞いたら泣きそうになった。

「——違うんです」

「どうしてそう悲しそうになるのですか？ 話していると楽しそうなのに、時々泣きそうな顔をされると、どうしてあげたら笑顔になるんだろうと思います」

神代は優しく首を傾げてくれる。言葉の一つ一つに、神代の誠意と優しさを感じた。

「私、このお見合いはお断りしなきゃいけないんです」

「どうして？」

「ごめんささい」

この人はとてもいい人だ。けれど、本来この素敵な人の隣にいるべきは、自分ではなくて従姉妹の菜々美だった。だからこそ、神代は何度も菜々美の名前を呼んでいる。

本当なら、この人は香澄と出会うことはなかったはずだ。それが正しいこと。正しい道に直さなければいけない。

「ごめんささい」

香澄は再度繰り返し返した。

「事情があるんですね」

神代は誠意があり優しいだけでなく、察しもいいのだろう。

「俺のこと、嫌ですか？ 嫌い？」

そうではない。男性が苦手な香澄でもいい人だと感じるくらい、神代はとても紳士だ。ふるふるっと香澄は首を横に振る。

すると、神代がそっと手を握った。振り払うこともできず、捉えられたまま、ただどうしたらいいかわからない気持ちで、神代を見つめることしかできなかった。

「事情があるなら今は逃げてもいいです。けど、俺は必ず追いかけてあなたのことを捕まえますよ」

そう言って、神代は香澄の指先に口付けをする。

あまりにも一瞬のことで香澄は戸惑い、ただ神代の綺麗な形の唇が自分の指先に触れるのを、見

ていることしかできなかった。

あのお見合いから二週間後、書道の道具を持った香澄は、稽古場に向かう車に揺られていた。送迎はまだ続いているのだ。

香澄の書道家としての活動は書道教室に限ったことではない。自身もまだ師匠について研鑽けんざんしている立場なのだ。

「では、また終わる頃にお待ちしています」

「よろしく願いました」

師匠の稽古場の玄関前で運転手と別れて中に入ると、師匠がテーブルで本をめくっていた。師匠の雅号がごうは清柊せいしゅうという。年齢は香澄のひと回りほど年上で、落ち着いた雰囲気まなづかの穏やかな人物だ。

身長は百八十センチくらいで、書道の世界ではかなり長身の方だろう。優しい顔立ちから、書道界の貴公子とも呼ばれている。本人は恥ずかしいからとその呼び名を嫌がっているが、香澄はなかなか似合いなのではないかと思っていた。

子どもの頃は清柊の父親に稽古をつけてもらっていたが、今は会派を継ぐ清柊に見てもらっている。師匠の息子と言っても書道歴は香澄の倍ほどもあり、比べ物にならない。

それでも、清柊は書道界では若手の部類に入るのだから、つくづく奥の深い世界である。

「柚木さん、こんにちは」

「清柊先生、よろしく願いました」

「はい。そういえば、そろそろ東部書道展に出品する作品の準備を始めないといけませんね」

「そうなんです」

書道展とひとことで言っても、書くものは漢字、仮名、調和体・近代詩文、小字数、篆刻てんげくなどいろんな部門がある。

香澄が書いているのは『調和体』というもので、漢字仮名交じり文とも呼ばれている。

漢字作品が素人では読みにくく、内容を理解することも難しいと言われている一方で、調和体は通常使っている日本語に近く、誰にでも読めて親しめると人気があるのだ。

書というものは意外と身近にもあるもので、香澄も会席料理店のお品書きの仕事を依頼されたことがある。また店名を書で、という店も結構ある。

そういう依頼を受けて書くのも書道家としての仕事だ。後日看板が掲げられているのを見たり、自分の書が広告や名刺などのデザインに使われているのを見たりすると、嬉しくなるものだった。

年に何度かある書道展に作品を出すのも、仕事の一つである。

先ほど清柊が言っていたのはその書道展のことだ。この『東部書道展』という展覧会は会派を問わず参加できて、歴史もあり有名なものだった。香澄も毎年出品している。

作品を書くためには、まずは『何を書く』かを考えなくてはいけない。

そして、書いたものを師匠に見てもらおう。会に所属する者が集まって、一日中書く錬成会という日もあって、そこでも練習を重ねる。半年ほど前から準備を開始するものなのだ。

香澄はお手本となる本の中から、印象深い言葉を書き出して書にすることになっていた。

おそらく清椋が手にしていたのも、その参考資料になりそうな本なのだろう。お稽古用の部屋にはそういう参考資料がたくさんあった。

香澄はその本棚の前に立ち、何か書の参考になるものはないかとチェックを始める。

「柚木さん、最近何かあった？」

夢中になって本棚を見ていた香澄はそう声をかけられて、思わず手を止める。

清椋が香澄のことをにこしながら見ていた。

「いえ……何もありませんよ？」

強いて言えば、お見合いをした。

けれどあれはお断りして終わりとなったのだし、香澄はもともと身代わりだったのだ。

出会った相手は素敵な人だったけれど、もう終わったことだ。

「ふうん？　なんか雰囲気が違う気がしたんですけどね」

「気のせいだと思いますよ」

「そうかなあ？　私はその手の勘は非常によいと自負しているんだけど。君がそう言うなら、

まあいい」

実際に清椋の勘が鋭いのも確かである。

「そうだな……柚木さんは、大正とか昭和初期の文豪の小説作品を書くのがいいかもしれない」

香澄は首を傾げた。

「宮沢賢治とか、夏目漱石とかですか？」

頭の中を『雨ニモマケズ……』などの文章がふとよぎる。学校で覚えさせられた記憶があった。

「泉鏡花とか谷崎潤一郎とかね」

「読んだことないです……」

「面白いよ。まあ、けど書きやすいのは近代の小説だろう」

そう言って清椋は一冊の文庫本を差し出した。

「あら？　谷崎潤一郎ではないんですか？」

「そうだね。君にはこちらの方が向いているだろう」

それは少し前に発売されたベストセラー小説で、香澄の記憶では文学賞を受賞していたし、映画化もされて大ヒットした作品だった。

「これを、書に？」

「よく読み込んでみて」

香澄はその本を受け取った。見覚えがある表紙だ。

一度読んだ記憶があったけれど、内容はもう忘れていた。

「うちにもあった気がしますけど。どこにやったかな……」

「それは資料だから持ち帰っていいよ」

「ありがとうございます」

その日は先日までのお稽古の直しを見てもらい、香澄は自宅に帰った。

自宅に戻り早速本棚を確認すると、やはり当時買った文庫が残っている。付箋ふせんを使って書き込みなどもしたので、自分の本を資料にすることにした。

清椋はなぜ、香澄に何かあったと思ったのだろうか。

香澄はデスクにやってくると、付箋とペンを取り出し、本を読み始める。

それは、破天荒はてなろうで魅力的な女性と、自分を凡人だと思っている従姉妹の話で、資料として読み始めたはずだったのに、妙に自分と重ねてしまう部分があった。自由に家出をし、実家に頼ることのない菜々美と、未だ実家の庇護下にある香澄。

どちらも幸せで、どちらが正しいということはない。

——この内容を書に……

これではまるで、自分の気持ちを書にしてみたいだ。

香澄はいつも書くものを決めると、その文を何度も読み込んで、自分の中に落とし込んでから書にする。

今回も同じようにするのだが、いつもより深く自分の中にあるものを見つめ直さなければいけないかもしれないと、覚悟を持って再度本に向かった。

しばらくした時だ。

「香澄ちゃん」

母が呼んでいる声に気づき香澄はハツとする。香澄はつい集中してしまっって周りが見えなくなる  
ことがあった。

「はい！」

部屋の入口で母は何とも言えない顔をしていた。

「香澄ちゃんにお客さまがいらしてるんだけど……」

「お客さま？」

「ええ」

母の歯切れが悪い。客間に向かうと父が困ったような顔をしていて、その向かいに見覚えのある  
男性が座っていた。

——え!? 嘘? 嘘でしょう?

もう会うことなんてないと思っていた——神代佳祐その人だった。

「か、神代さん!? どうして?」

「どうして? 俺は、『必ず追いかけてあなたのことを捕まえる』と言ったでしょう?」

神代は香澄に向かって、とても綺麗な微笑みを見せた。

香澄と神代は柚木家の庭を二人で並んで歩いていた。

何と言葉を発したらいいかわからず、香澄はただ黙って神代の隣を歩くことしかできなかった。  
それに、今こうして神代が隣にいることも信じられない。

ちよっとだけ頬を捻ひねってみた。

(痛い……やっぱり夢じゃないみたい)

くすつと隣から笑い声が聞こえた。

「今、頬を引つ張った？」

見られていたことが分かって香澄の顔が赤くなる。前もそうだった。神代は意外と香澄から目を離さず、見守ってくれているようだ。

「夢かと思つて……」

「それは俺の方です。本当にあなたが俺の横にいるのになつて、今でも信じられない」

確かに、あのお見合いからすでに二週間は経過していた。また会うことがあるなんて思いもしなかつた。

「改めて自己紹介しましょう。神代佳祐です。あなたの名前を覚えて？」

お見合いの時とは違つていた。あの時は、お見合い相手の名前など把握していると神代は言ったのだ。

きつともう本当の名前を言つても構わない。

「柚木香澄です」

「香澄さん、見つけた。本当にあなただ」

そう言つて見せた神代の笑顔は輝かんばかりに美しく、香澄には眩しいくらいだった。

「あの……本当に探してくださつたのですか？」

疑問に思つて香澄は聞いてみた。

「ええ。そうです。あなたがシンデレラのように、ガラスの靴を置いていつてくれたから助かつた」

「ガラスの靴？」

そんなものを置いていった覚えはない。

「ヒントのことですよ。あなたはあの時、書道の話をしてくれましたよね」

こくりと香澄は頷いた。それを見て神代は軽く微笑んで、話を続ける。

『『柚木菜々美 書道』で検索してみました。けれど、探すことができなくて苦労しました。調べているうちに、菜々美さんと年の近い従姉妹がいることが分かつたんです。書は本名で活動していないんですね」

「あ、そうです。雅号つていう書道用の名前を使いますから」

もちろん香澄にも雅号があつた。神代は眉根を寄せて苦笑している。

「知らなかつたんです。けど、俺はあなたを探し当てた」

あの綺麗な榛色の瞳が、真つすぐに香澄をとらえていた。

「俺と結婚を前提にお付き合いしてくれませんか？」

「結婚を前提!? どうしてそうなるんです？」

香澄はお見合いを断つたはずなのに。けれど、そんなことは気にしていないように、神代は優しく香澄に話しかける。

「だつてお見合いに来ていたでしょう。あれつて結婚前提ですよ」

「けど、神代さんもご存じなんですよね? お見合いは菜々美ちゃんの身代わりで……」

ここまで追いかけてきたということは、神代は香澄が菜々美の身代わりだったという事実を知つ

ているはずだ。

「柚木家としてはどちらでも構わないみたいですよ？」

それはそうかもしれないけれど。どちらでもとはどういう意味だろうか。用意周到さを感じる。

「伯父さま——菜々美さんのお父さまにも、香澄さんのお父さまにもご了承くださいました。あなたと結婚前提の交際をさせていただくことについて、お二人とも大変にお喜びで」

そう言っつて、神代はにっこりと笑う。神代はすでに伯父にも香澄の父にもしつかりと交際の許可を取っているらしい。

「ああ、そう言えば、あなたを身代わりにしたことを謝罪されましたね」

しれつと神代に言われ、香澄は言葉返すことができない。用意周到どころか、父の許可まで得ていて、身動きできなくさせられていた。香澄は心の中で叫ぶだけだ。

——伯父さまっ！ お父さままで、裏切り者っ！

逃げられない……いや、こんな風に追いかけられて逃げる気にはなれなかった。

「私、菜々美ちゃんの身代わりだからっ……」

「うん。それがあなたがお断りしなくちゃいけない事情だったんですね。じゃあ、今は？ 俺は

あの時もつと一緒にいたいと思っつて、柚木香澄さんに交際を申し込んでいます」

綺麗な顔で微笑んで首を傾げられたら、もう逆らうことなんてできない。しかもあの時、話していて楽しかったことも間違いではない。

身代わりでも構わないと言っつてくれた。だましたような形なのに、そのことについて怒りもせず、

ひたすら香澄を探してくれていたと聞いて、心が動かないわけがない。

神代はとても誠実で、こうと決めたら熱意をもって対応するのだと香澄は目の当たりにした。

(この人は信じられる人だわ)

初めての交際。まさかそれが結婚を前提としたものになるとは思いもしなかったけれど、そんな始まりもいいかも知れない。

「その、ふつつか者ですが……っ、よろしくお願いたします」

「こちらこそ、よろしくお願いたします」

神代が香澄を抱きしめる。爽やかな香水の香りが鼻を抜け、抱きしめられても香澄は怖くなくかつた。

——怖く……ない。

むしろその腕の中は安心できる気がした。

「一緒に映画に行っつてくれる？」

抱きしめられたまま囁かれて、香澄は笑っつてしまった。

「行きましよう」

ぎゅうつと香澄を抱く腕の力が強くなる。

「本当にあなただ……」

まるでやつと呼吸ができたとてもいうような、吐息混じりの声に必死さを感じて、思わず香澄は神代の広い背中に手を回してしまった。

自分を探し出してくれた。香澄は諦めたのに、この人は諦めなかったのだ。そのことをとても尊く感じた。

「神代さん……」

「ん？」

「探し出してくれて、ありがとうございます」

「こちらこそ。見つかってくれてありがとう」

ん？ と思いい顔を上げると、神代がとても優しい顔で微笑んでいた。つられて香澄は笑ってしまっただ。

「もう！ 何言ってるんです？」

「ああ、やっぱり可愛い。その笑顔が見たかった」

こうして交際することとなった二人は、連絡先を交換したのだった。

## 第二章 ポジティブとネガティブの間に

神代は大手企業の経営を任せられるやり手のCEOであり、香澄は半年後に展覧会を控えた書道家だ。

連絡先を交換したものの、なかなか直接会ったり電話したりする時間はなく、普段はメッセージ

アプリでのやり取りが中心となっていた。

実際というものに慣れない香澄としては、直接ではなくまずは文章でのやり取りができるのはありがたかった。

神代とのやり取りを始めて一週間くらい経った時のことだ。

香澄が夕方からの書道教室のために別棟で準備をしていると、メッセージアプリの着信を知らせる音が鳴った。

（神代さん……？）

神代が日中の忙しい時間に連絡してくることは珍しい。

「わ……あっ！」

メッセージアプリを開いて、思わず声が漏れてしまった。

重なる高層ビルの隙間から、見事な夕陽が見える写真が送られてきたのだ。琥珀色の夕陽は、ビルを陰にして柔らかく、温かい光を放っていた。きっと自社のビルから見えた夕陽だろう。

『綺麗な夕陽だったから、共有したかった』

シンプルなメッセージだったが、香澄と共有しようと思いついてくれたことが嬉しい。

『綺麗な夕陽ありがとうございます。お気持ちがとても嬉しいです』

返信するとパッと既読がついたから、神代が香澄のメッセージを確認したのは分かった。

（気にしてくれていたのね）

やはり仕事が忙しいようでその後のやり取りはなかったが、それでも綺麗なものを香澄に見せた

いと思う神代の行動は、香澄の心を温かい気持ちで満たしてくれた。

それからまた三日ほどあとのことだ。

香澄が別棟に入ろうとすると、玄関の敷石に黒猫が寝転がっていた。

「くろちゃん」

その黒猫は近所のお家で飼われている猫のだが、天気の良い日は陽の光で温まった敷石の上でお昼寝をしていることがある。

香澄が邪魔をしないように、ひよいっと避けて通ろうとすると、ふにゃんと可愛らしい声で鳴いて、コロンとお腹を見せた。

(か……可愛いわ!)

ふと、先日神代が夕陽の写真を送ってくれたことが思い浮かんで、くろちゃんの頭を撫でながら、写真に収める。

『たまに玄関にいる、くろちゃんです。とてもいい子で頭を撫でさせてくれました』

こんなメッセージを送ってもいいんだろうかと少し迷いながら、それでも先日神代から送られた何でもないメッセージが嬉しかったので、思い切って送信ボタンを押してみる。

(忙しかったら、きつと無視してくださいね)

そのあとは教室の準備をしていますが、スマートフォンの存在が気になってそわそわしてしまいました。どうしよう、やっぱり迷惑だったんだろうかと不安に思い始めた時に、着信音が鳴った。

香澄は急いでスマートフォンを手にする。

『心が和む写真をありがとうございます。くろちゃんは気軽に撫でてもらえて羨ましい。頑張ってる仕事をしているので、今度褒めてくださいね』

「まあ……」

香澄は思わずくすくすと笑ってしまった。

『今は忙しいのですが、来週には時間が取れそうです。一緒にディナーでもいかがですか？』

「えっ!？」

思わず声に出していた。

スマートフォンを操作して、スケジュールを確認する。幸い、来週はお稽古以外に用事は入っていないようだ。

『お稽古のない日でしたら、ディナーに行けそうです』

『分かりました。では、楽しみにしています。お店はまた別途お送りしますね』

心が動くものを共有できたり、不在でも気にかけてくれたりすることがこんなに嬉しいなんて、香澄は神代と交際して初めて知った。

それから少しあとのことだ。神代が『通話してもいいですか?』とメッセージをくれた。

香澄が了承すると、すぐに電話がかかってきた。久しぶりに直接話すので、香澄は胸をドキドキさせながら通話ボタンを押した。

『やつと声が聞きました』

声を聞いて、香澄も神代の声が聞きたかったのだと自覚する。低くてよく響く声だ。

「お時間、大丈夫ですか？」

『優しいですね。もちろんです。本当はもつと連絡したいのですが……』

「いいえ。先日は綺麗な夕陽のお写真をありがとうございます」

『こちらこそ、可愛い猫をありがとうございます。とても癒されました。ちょうど重要な会議に入るところだったので、いい具合に力が抜けました』

「え？ 大丈夫だったんですか？」

『ピリピリしたまま会議に臨んだ方がよくなかったでしょうね。おかげでいい会議になりましたよ』

最初は緊張していた香澄だったが、神代が気軽に話してくれるので、だんだん気持ちも楽になり、楽しくなってきた。

「少しでもお役に立つてよかったです」

スマートフォンの方から、神代のため息が聞こえた。

『はあ……せっかくシンデレラを見つけたのに、一向にお会いできない……』

物語では、「お姫さまを探し当てた王子さまは幸せに暮らしました」というのがエンディングであり、その後の生活については描かれぬのが一般的だ。

初めて交際する香澄にとっては、会うことができなくても神代が気を遣ってメッセージを送って

くれていることは分かるし、それだけでも胸が躍るような心地を感じていた。

「神代さんもお忙しいですね」

『しかも俺のお姫さまは聞き分けがよすぎて、会いたいかわがままを言ってくれないし』  
——どうしよう。

会いたいのとは間違いないのだが、何せ交際歴のない香澄には、どれくらい相手に甘えていいのか分からないというのが、正直な思いだった。

「え？ えっ？ わがままを言った方がいいんですか？ 私も会いたいです……本当は」

小さい声で正直な気持ちを打ち明けたら、さらに大きなため息のあと、甘くて低い声が耳をくすぐった。

『本当に可愛い。今すぐぎゅうつとしたい。そういえば、映画を観に行こうという約束も果たせていない』

ぎゅつとしたいなんて言われたらドキンとする。あの時の神代の香水の香りが蘇るようで、熱を冷ますように。パタパタと手で顔の周りをおおぐ。

『どうかされましたか？』

「あの、神代さんのお時間ができてから大丈夫ですよ」

『来週のディナーの予定は忘れていませんか？』

「ええ。もちろんです。楽しみにしていますね」

先日のメッセージのあと、神代から具体的な日程やお店が送られてきていたのだ。

実質、香澄と神代の初めてのデートということになる。

『俺もです。楽しみすぎてどんどん仕事を進めていくので、秘書から何かあったのかと勘繰られています』

その言い方にくすぐすと香澄は笑ってしまった。

「秘書の方に？」

『そうです。俺の仕事が一気に片付いたそうですよ。まあ、それも納得だけれど。今の俺は、人參を目の前にぶら下げられた馬みたいな状態です』

「まあ……」

神代が飾らずいろんなことを話してくれるので、香澄も心がくすぐられるような気持ちになる。

これが嬉しいとか楽しいということで、交際の醜<sup>だいき</sup>醜<sup>み</sup>味なのだろう。だから、香澄も頑張って自分の気持ちを打ち明けてみることにした。

「私も来週のディナーでお会いできるのを楽しみにしているんです」

『一緒ですね』

神代がああ綺麗な顔で微笑んでいる姿が、目に浮かぶようだった。温かい気持ちになつて香澄は通話を終える。

また今度……と通話を切る時は寂しくて、本当に心がちぎれるかのようにだった。

さつきまで神代と話していたスマートフォンを、香澄は胸にきゅっと押し当てる。

——私、神代さんに他の人に対するのとは違う好意を持っている。

それを恋心と言えるのかは、まだ香澄には分からなかったけれど、甘くて温かい気持ちになったのは間違いなかった。

\*\*\*

初めて会った時は、印象が写真とあまりにも違うことに驚いた。美人であることに変わりはないけれど、写真ではもっと気が強そうな印象だったから。

自己紹介はいらないと伝えたら、反発されるかと思っただが、香澄は戸惑ったような表情をしかけただけだった。それまでは、政略的なものだから顔を合わせれば十分だと思っていたのに、その時の香澄の戸惑った顔があまりに頼りなく、神代の心に引っかかったのだ。

食事をしている間も神代は彼女の様子をつぶさに見ていた。

結婚したら一緒に過ごすのだ。食事の仕方が合うか合わないかは重要だと神代は思っている。

品のない食事の仕方や、食べるペースが合わなければそれもストレスとなる。そういった意味で、香澄の食事の仕方は好ましいものだった。

店の人への対応も丁寧で、こちらが客だからと高飛車になることもない。料理が自分の前に運ばれてくると、素直に嬉しそうな表情をする。食事をする店は神代が選択したものであったので、喜んでもらえればこちらも嬉しいし、気が合うなと感じる。

香澄が前菜を口に入れた時、言葉にしなくてもその表情には『美味しい！』という気持ちがあふ

れていて、微笑ましく感じたものだった。

香澄に対して可愛いな、と思ったのはそれが最初だ。

ぱくぱくと嬉しそうに食事を進める姿は本当に可愛らしく、小動物のようだ。写真で見た気の強そうな印象など、どこかに行ってしまった。

——榛色……と。

色素が薄く、彫りの深い顔立ちなので「ハーフなの？」と聞かれることはたまにあるが、瞳や髪の色を榛色と称されたことはなかった。

その表現が神代はとても気に入ってしまったのだ。

だから、適当に顔合わせを済ませたら帰るつもりだったのに、香澄をお気に入りの噴水パフォーマンスに誘ってしまった。瞳をきらきらと輝かせながら噴水を見ている香澄の横顔を見つめ、胸がぎゅっと絞られるような気持ちになったものだ。

もしもここでこのお見合いを断ったら、彼女はまた誰か他の人とお見合いをして、自分以外の人のものになってしまうかもしれない。そんなことを考えると、許せないような気持ちになった。

「ご趣味は？ とか聞くものなんですかね？」

そう聞くと、彼女は「まあ……」と言つてくすくす笑った。その笑顔が可愛くて、ついぼろっと可愛いとこぼすと、「お上手なんですね」ときらりと流されてしまつて、少し神代は焦った。

本当に心からそう思っているのに、流されてはかなわない。返ってきたのは、「書道が好きなんです」という言葉だった。そこで初めてあの写真の彼女だろうかという疑問が刺(とど)るように心に引

かかった。

そのあとは、書道についていろいろ教えてくれた。今まであまり関わりのない分野だったが、香澄が瞳を輝かせながら話をするから、とても興味をひかれた。

詳しく聞くと教室で教えているというので、「柚木先生」と呼んだら彼女はふわりと頬を染めた。そのピンクに染まった頬に思わず触れてしまったのは、仕方のないことではないだろうか。

指先が触れただけなのに、驚いたように身体を揺らす仕草まで神代の好みだった。思うまま抱きしめたい。そんな風に思うことはこれまで一度もなく、自分で自分に驚いたくらいだ。

この頃には、香澄とお見合いを進めることを決めていた。けれど、一緒に過ごしている香澄は好意らしきものを見せるのに、時折悲しそうな切ない表情をした。それがとても気になっていた。

「ごめんささ」

そう言われた時は一瞬絶望しかけたが、香澄の顔があまりにも悲しそうなので事情があるのだと察した。

——このまま逃がすものか！

めったに出会わない好みドンピシャの女性なのだ。

「俺のこと、嫌ですか？ 嫌い？」

賭けるような思いでそう聞いた。

(絶対に嫌いではないはずだ……！)

それは、祈りにも似た気持ちだった。

嫌いですかと聞いた神代に、ふるふるつと香澄は首を横に振ったのだ。それでも香澄から返ってくる言葉はそれ以上なかった。

嫌いじゃない。今はそれだけが分かればよかった。絶対に捕まえる。自分がそう決めてさえいれば必ず実現する。

香澄の手を握ったのはそう自分に誓うためだ。

「事情があるなら今は逃げてもいいです。けど、俺は必ず追いかけてあなたのことを捕まえますよ」

そう言つて、指先に口付けたのは香澄への誓いだった。

もともと神代はリサーチが得意分野だ。その特技を活かして柚木家を調べてみた。

柚木菜々美のことを探してみると、リサーチに引っかけたのは、やはりあの日会った彼女とは別人だった。

「違うな……」

SNSが判明したので確認してみたが、柚木菜々美は非常に活動的な人物のようで、投稿には書道のしの字もなかった。

友人とキャンプに行ったり、外でスポーツしたりする姿は、あの時会った彼女の姿とは全く一致しない。

次に、書道という単語と合わせて柚木の名前を検索してみたが、引っかけなかった。いろいろ

調査して分かったことは、書道には雅号と言われる別の名前があり、おそらくあの時会った彼女も雅号を使用しているということだ。

彼女が教えているという書道教室も探してみたものの、ネットでは引っかけなかった。個人的に開いている教室なら、確かに検索では引っかけられない可能性もある。

正直、個人が個人を探すということがこれほど難航するものだとは思わなかった。それでも粘り強く探したのは、どうしてもあの時の彼女にもう一度会いたかったからだ。結局神代が頼ったのは、リサーチを専門としている部署の友人だった。

彼は普段、出勤はせずリモートで働いていることが多いので、こんな時にCEOとしての権限を使うのもどうかとは思つたが、会社呼び出した。

急に呼び出された友人は、執務室で神代が話した内容に驚愕した。

「個人の調査!？」

そんなことは依頼したことがないので、友人も非常に驚いていたが、神代が「どうしても知りたなんだ!」と頼み込むと、目を三日月のように細めた。

「普段はそんなことを言わない神代が、ここまでするってことは相当だな」

「そう思ってもらつて構わない。一度は顔を合わせたんだ。実在しないわけじゃない。本当は直接彼女の家族に聞いてもいいんだが、最初からだますつもりだったのか、現状では判断できないんだから、こちらから頭を下げるようなことはしたくない」

神代がそう説明すると友人は納得したようだった。

「分かった。調査結果を悪いことで使うわけではないようだから、個人的に引き受ける」  
「礼はする」

そう言うと、友人はにやりと笑った。

「金はいらぬ。友達として受けるものだ。けど調査の結果によって、彼女と上手くいった時は、ぜひその彼女に会わせてくれ」

結果がどうなるか、その時点では分からなかったので承知したのだが、今にして思えばそんな約束をしてもよかつたのだろうかと、少し悔やむ部分もなくはない。

それでも友人はさすがのリサーチ力で、一週間ほどで彼女の正体を調べ上げた。

「名前は柚木香澄。『香る』という字に、澄んだ水の『澄』だ。年齢は聞いていたものと違うな。二十六歳だ。書道家なのも間違いない。雅号は『翠澄』、翡翠の翠に香澄の澄と書く。書道教室の他にも書によるデザインなんかもしていて、店の看板や会社の名前などに提供しているみたいだ。確かに美人だな。柔らかい雰囲気、というか」

「顔まで見たのか!？」

「展覧会では何度も入賞しているみたいだし、会派での仕事も引き受けている関係で、サイトに写真が掲載されていたんだ」

友人は彼女の写真まで手に入れてくれていた。神代はその写真が印刷された調査書をさっと自分の方に引き寄せる。

「この子だ。間違いない」

間違えるはずがない。逃げてみても必ず捕まえると誓った相手だ。

長い黒髪に、色白の肌、卵型の優しげな輪郭、実年齢より若く見える大きな目や可愛らしい口元。間違いない。

「住所は柚木の家だったよ。ただし、最初に聞いた柚木家とは別。親族なんだな。彼女自身は親と一緒に暮らしている。書道教室は、実家の敷地の中でごんまりとやっているものだから見つからなかつたんだ」

「さすがだ。ありがとう」

そして、香澄の父親の不動産会社を、神代は訪ねて行ったのだった。

神代を見た父親の顔は怯えを含んでいた。

「ひいっ……」

——幽霊でも見たような顔をするのはやめてもらおうか。

神代はにっこりとわざとらしく笑って見せた。

「俺が誰かは分かっていますよね？」

「ま……まさか。だって神代さんほどの方なら、お見合いなんて引きも切らずにくるだろうと思っ  
ていたんです……」

「俺は本気でした。本当に、香澄さんと結婚前提でお付き合いをしたいと思っ  
ているんです！」

「か……香澄……」

父親はガックリしていた。

「香澄のこともご存じなんですね」

神代が経緯を予想するにこんなところだろう。

本来の見合い相手は『柚木菜々美』だった。しかし何らかの事情で菜々美が出席できなくなり、見合いに穴を開けるわけにはいかないと伯父に頼まれ、『柚木香澄』が身代わりとなって見合いをした。

伯父は真剣だったろうが、当人達はお互いに断る前提の見合いだ。

誤算があったとすれば、神代が本気になったということと、おそらく香澄も悪くは思っていないということだ。

「俺は香澄さんと正式にお見合いを進めたい。何か問題はありますか？」

「香澄の意向だけ確認してください」

その父親の言葉に神代は頷いた。

「それはもちろんです。香澄さんの意向に反してまで、自分の意見を押し付けるつもりはありません。もしも、香澄さんも構わないと言ってくれたら……いいですか？」

こくりと父親が頷くのを神代は確認した。

「その際は神代さんにお任せいたします」

そうして、柚木家で香澄と会うことをセッティングしてもらったのだ。

神代は、ガックリと肩を落としている父親に優しく言った。

「柚木さん、誓います。無茶は絶対にしません。香澄さんの気持ちに反して無理強いすることもし

ないとお約束します。俺はただ……あの時会った香澄さんにもう一度お会いして、本当のことを聞きたいだけです」

「そうですね……神代さんはとても誠実な方だ。お任せいたします」

それでも気持ちが落ち込むのは、父親として娘を手離さなくてはいけない可能性が出てきたからだろう。

「大事にします」

心からそう言うと、香澄の父親は顔を上げて微妙な感じで笑った。

\*\*\*

「先生、見ていただいてもよろしいですか？」

教室で、生徒が香澄に細い毛筆で書かれた紙を持ってきた。生徒といっても香澄よりもだいぶ年を重ねた女性だ。

持ってきたのは親しい人に送る手紙だった。平日の昼間の教室は時間を持て余したご婦人や、改めて字を習いたいという紳士が通ってくるが多い。

普段教室では練習用の半紙を使っているが、香澄に見てほしいと持ってきたものは紙にもこだわったのか、墨が綺麗ににじむような用紙が使われていた。

「お手紙、完成しましたか？」